

# 多様な立場の幅広い世代が参画したまちづくり

よう か まちしょうてんがい

## 八日町商店街 ■ 宮城県気仙沼市

### 1 商店街の抱えていた課題及びそれに対する取組の概要

2017年～ | 地域住民による空き地・空き店舗の活用

2020年～ | 商店街での人の滞留を生み出すための店舗の開業

#### 共通課題

- 東日本大震災での津波被害によって生じた空き地の有効活用
- 少子高齢化により衰退する商店街の活性化

#### 個別課題

- 他地域から来訪者を呼び込むための取組の実施
- まちの景観の改善と治安の維持
- 昼間の時間帯において営業する店舗の増加
- 商店街を通過する人が滞留する場所の提供

#### 取組概要

- 「八日町みちくさプロジェクト」チームの発足
  - ・第2次総合計画の策定に向け、気仙沼市が市民参加型のワークショップを複数回にわたり開催。
  - ・ワークショップ参加者が中心となり、「みちくさできるまちづくり」を目指した「八日町みちくさプロジェクト」が発足。地元の市民だけでなく、UターンやIターンの若者を含め約50名が集まった。
- 空き地・空き店舗を活用した様々なイベントを実施
  - ・本プロジェクトチームは、2018年2月から10月にかけて、商店街内の空き地や空き店舗を活用することを目的としたイベントを10回続けて開催。その後も、商店街と連携したイベントなどを多数開催した。
  - ・商店街振興組合とコミュニティデザインを事業とする合同会社 moyai が中心となり、これまでの実施内容をまとめた「みちくさガイドブック」を作成。コンセプトを共有し、共感を集めることで、プロジェクトに参画するメンバーを増やしている。
- 「八日町のアカリプロジェクト」の開始
  - ・当時、商店街には外灯が少なく、景観の改善や防犯面で課題があった。
  - ・まちづくり会社である「合同会社気仙沼八日町まちづくり」が、地域住民が散策したくなる夜の景観づくりをテーマに「八日町のアカリプロジェクト」を開始。
  - ・上方から照らす明かりではなく、足下の高さに照明を6箇所設置。これらにより、空き地や駐車場などの暗がりが目立たず、歩道空間が活きるまち並みを実現。
- 共有型の日替わり商店「てんまど」の開業
  - ・商店街を拠点に活動する建築士である吉川氏と県内の事業者2社によって設立された「みちくさできる日常をつくる会」が空き店舗を改修。
  - ・市役所に面した人通りが多い立地を活かし、複数の事業者が弁当・パンなどを日替わりに販売する拠点「てんまど」を整備。
  - ・同スペースは1日1,000円から物品の販売やイベントを行うスペースとして貸し出している。空き店舗を有効に活用しながら、商店街への人の滞留を生み出した。
- 喫茶店「くるくる喫茶 うつみ」の開業
  - ・近所の高齢者や外回り営業のサラリーマンから「昼間にひと休みできる場がほしい」という意見があった。
  - ・「合同会社気仙沼八日町まちづくり」が県の補助金を活用し、閉店した菓子店があった空き店舗をリノベーションし、喫茶店「くるくる喫茶 うつみ」を開業。吉川氏と「合同会社気仙沼八日町まちづくり」の代表であった島田氏が共同で開設し、吉川氏が経営。
  - ・くすんだ緑色の屋根にガラス張りの昭和の雰囲気を残す外観を保ちつつ、内装はモダンに一新。商店街に人が集まる核となる場を作り上げている。
  - ・その他にも、料理の腕を振りたい地域住民に対して店舗を貸し出す「シェアキッチン」を整備する事業を計画中。



空き地での映画観賞会イベント（八日町みちくさプロジェクト）



商店街の滞留拠点「くるくる喫茶うつみ」

### 2 取組の成果

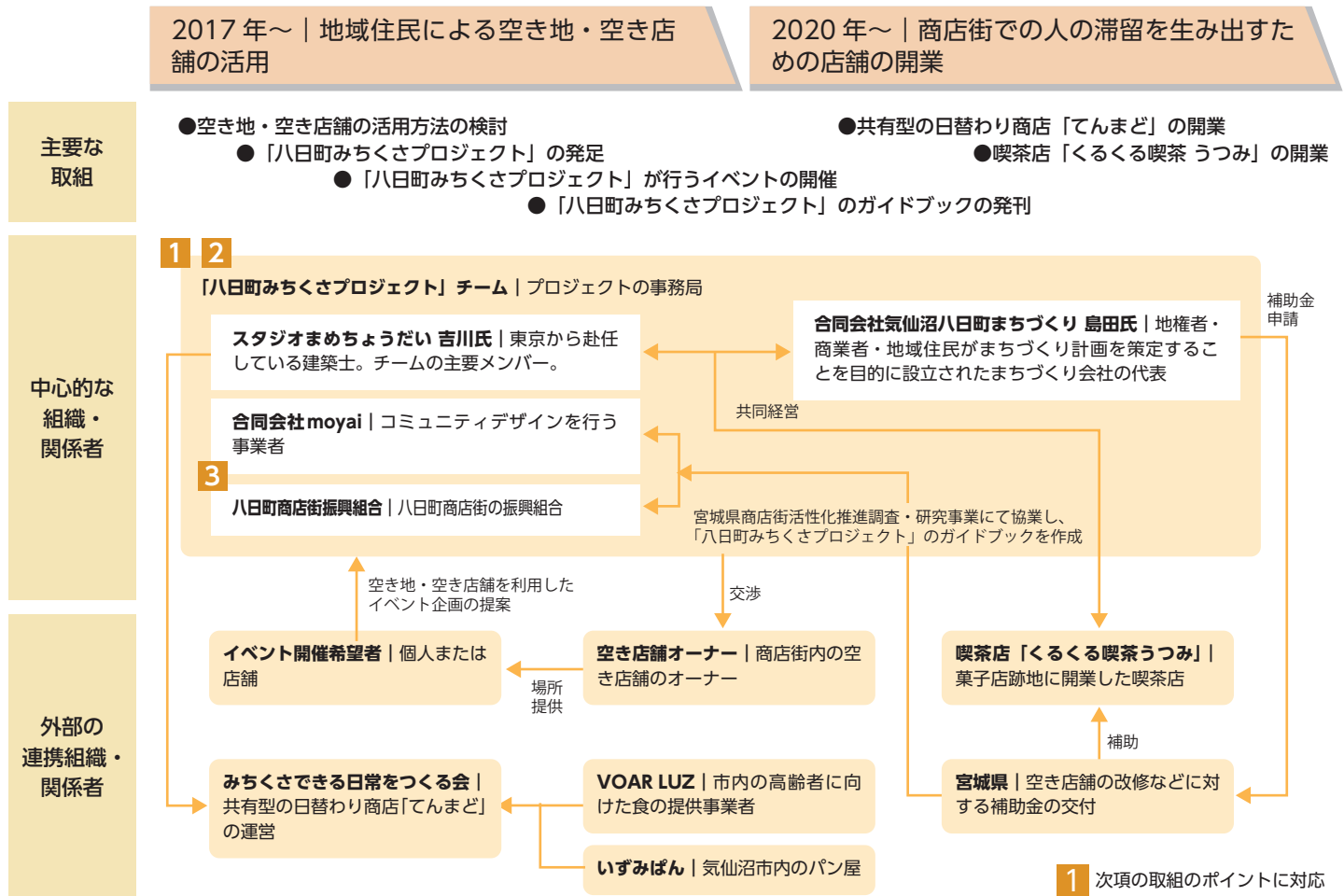
#### ※ 「八日町みちくさプロジェクト」が民間のコンペティションにて特別賞を受賞

- ・「八日町みちくさプロジェクト」では、一人一人の顔が見えるイベントを開催するなど、中心市街地に点在する空きスペースを有効に利活用。所属や立場、老若男女の隔たりなく、多様な人々を巻き込んだコミュニティを作り上げ、まちづくりに関わるプレイヤーを増やしている。
- ・本プロジェクトでは短期間に多くの人が参画し、小規模かつ連鎖的にイベントが行われている。これらを踏まえ、パブリックスペースを豊かにすることを目指すメディア「ソトノバ」が主催する「ソトノバアワード2018」にて、特別賞の審査員賞を受賞するなど、外部からの注目も集めている。

#### ※ 新たな店舗が開業することにより、商店街への人流が変化

- ・事業者が弁当・パンなどを日替わりに販売する拠点「てんまど」や、滞留の拠点となる喫茶店「くるくる喫茶うつみ」の開業などにより、商店街への来街者が徐々に増加。特に、昼休憩時に弁当を購入するなど、昼間の来街者が増え、商店街における人流が変化している。

### 3 取組実現のための推進体制～域内外人材等の連携プロセス～



### 4 取組のポイント

#### 1 取組のコンセプトの言語化と人と人がつながる場を作ることで、多様な取組が生まれるきっかけを創出

東日本大震災以降、急速な人口減少や少子高齢化に伴い、中心市街地の活気が失われていた。このため、気仙沼市は第2次総合計画の策定に当たり、市民参加型のワークショップを複数回開催。毎回100名近くの市民が集まり、まちの未来について議論された。計画を作って終わりではなく、実践できる場を作るため、計画策定後もワークショップの参加メンバーが集まり、2018年に「八日町みちくさプロジェクト」が立ち上がった。「八日町みちくさプロジェクト」では、老舗の海苔屋前にある空きスペースでのおむすび屋台の開業や、呉服店前にある空きスペースでの足つぼマッサージやハンドマッサージのサービスを提供するイベント、美容学生によるメイク講座とヘアメイクを実践するイベントなど、多様な取組が行われている。取組のコンセプトを言語化し、まちづくりに関わる方が集まる「開かれた場」や「粋組み」を作ることで、それぞれが自由に活動するきっかけを作り上げ、小規模かつ連鎖的な取組が生まれている。

#### 2 若者を巻き込み、まちづくりが自分事化する仕掛けづくり

イベントを実施する場合、開催することが目的となり、日常には何も残らないことがある。このため、八日町みちくさプロジェクトでは、多様な方々にまちづくりに参画してもらい、新しい取組が生まれ続ける環境を作ることを心掛けた。例えば、市内の高校生やU・Iターンを考える若者を、店主との意見交換の場に誘い、新しいアイデアの創出や本プロジェクトでの実践につなげている。また、プロジェクトのコンセプトやこれまでの実施内容をまとめた「みちくさガイドブック」を作成し、他地域に対しても広く参加を呼びかけている。プロジェクトに参加する門戸を広げ、自分事として参画できるよう、やりたいことを話し合う場を作る。プロジェクトへの参加をきっかけに「できること、やりたいこと」を軸にした活動が新たに生まれるなど、それぞれが楽しめる範囲でまちづくりに参画できる環境につながっている。

#### 3 組織間の連携により、個性豊かな新たなアイデアを創出

2019年9月、八日町商店街と八日町みちくさプロジェクトが連携し、「八日町昭和ジャンボリー」を開催。商店街のメンバーは、市役所内のホールで昭和の駄菓子屋や遊びを体験できるコーナーを設置。また、八日町みちくさプロジェクトのメンバーは、商店街内の公園や空き地で昭和の歌謡曲を用いたライブや、昭和の給食を体験できるイベントなどを実施した。多様な人・組織・団体が参画する八日町みちくさプロジェクトと商店街が連携することで、個性豊かな新たなアイデアの創出につながり、集客力と相乗効果のある取組が生まれている。

### 5 商店街と周辺の基本情報

- 所在地：宮城県気仙沼市
- 人口（宮城県気仙沼市）：約6万人（2021年1月1日時点）

八日町商店街は、気仙沼駅から歩いて約15分に位置し、商店街の中央部には気仙沼市役所が立地している。飲食店や衣料品店、家具屋、金物屋など、様々な店舗が営業している。